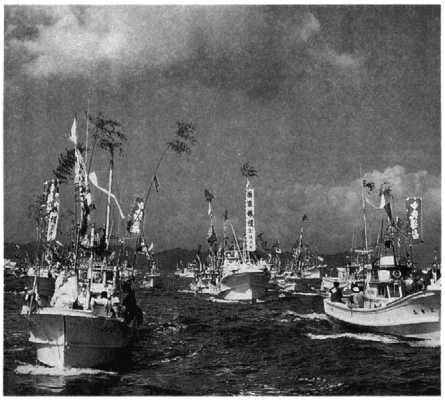
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311㈹
定価　一年送料共　1000円

筑前宗像に秋を告げる
みあれ祭斎行



旧暦八月十五夜を迎へ、各地で秋祭がおこなはれる季節となった。筆者も千葉県市原市の上総国総社ともいはれる飯香岡八幡宮の大祭と、館山市の安房国総社の流れを引継ぐ鶴谷八幡宮の例祭を目の当たりにする機会を得た。どちらも古い国府の祭りの伝統を継承する祭りとされ、飯香岡八幡宮の祭りでは、柳楯といふ柳の枝で編んだ楯のやうな形の神籬を、旧国府推定地付近の村から、行列を仕立てて八幡宮に担いで来る神事がある。この行列が八幡宮に到着しないと神輿の渡御はおろか、祭儀も執行できない重要なものであるといふが、考へてみれば、何と不思議なものであらうか。

また、安房の鶴谷八幡宮の祭りでは、旧安房国の有力神社十社の神輿が八幡宮にある御仮屋に御出祭され、街や境内を練り回る。幾つかの神輿は、数キロもある道のりを、御出祭のために未だにトラックを使はずに渡御される。そのさまは、力強く壮観である。さらにそれを十重二十重取り巻く見物の人人。「すごい人だねー」といふ言葉が、だれの口からも洩れてくる。そんな中で六十代後半から七十代前半とおぼしき「おばさん」達が話してゐた。こんな風に祭りができるなんてあはせねー」「日本はいいねー」、それから何度も「日本はいいねー」を繰り返してゐた。祭りの時と場を共有することによって実感できる、この連帯感と幸福感。日本は、本来「本当にいい国なのだ」と思ふと同時に、ユダヤ人の悲劇が頭をかすめた。

○

九月の初旬、山形市の国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会主催による『SHOAH（ショア）』といふ映画が上映された。第二次世界大戦のナチスによるヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策を描いた九時間二十三分にも及ぶ長編ドキュメンタリー映画である。その全編が関係者の証言だけで構成されてゐる。フランス人のクロード・ランスマン監督が十一年の歳月と膨大な量のフィルムを回して証言を撮り続け一九八五年に完成させたが、日本での公開まで、十年を待たなければならなかったといふ。それは、その長さと日本語字幕を入れる困難さからであったといふが、ドキュメンタリー映画作家の作品にかける情熱と執拗さが、歴史の真実を暴き出してゆく凄まじさに圧倒される思ひであった。これまで公開されたスピルバーグ監督の『シンドラーのリスト』やアラン・レネ監督の『夜と霧』は、あくまで商業映画であって、どうしても作られた映像の思ひを払拭できなかった。しかし、『ショア』は、証言のみで綴られてゐて、証言に出てくる場所の現在の風景を淡々と映し出すばかりである。それは、語られる内容の重さに観客は絶句する。

秋、祭、日本

ポーランドのヘウムノといふ町にあった収容所に入れられた四十万人のユダヤ人のうち、生き残ったたった二人のうちの一人が、いやいやながら現場を訪れて言葉少なに語る。

ポーランドにあったトレブリンカといふユダヤ人絶滅収容所では、他の収容所などから一列車で到着するユダヤ人、約四千人を到着二時間後には虐殺の痕跡を一切残さず処理し、次の列車の到着に備へる日々が続いたといふ。最盛期には一日一万八千人の人々が犠牲になった。それでもアウシュビッツに比べれば、トレブリンカは小規模のベルトコンベア操業だった元ナチス親衛隊伍長は証言してゐる。

五百万から六百万にのぼるといはれるユダヤ人の虐殺システムは一朝一夕にできたものではなく、それは長い複雑な過程と「技術の革新」「効率化」の追求の中で作られて行ったものだといふ。それは、この国の人類史上例を見ない規模と意図を持った政策であり、単に戦争によって必然的にもたらされる悪とは、異質なものとして、深く認識しておく必要がある。しかし、国と組織的な抵抗組織を持てなかった民族に現実に起こった悲劇である。

○

国と国の防衛力を軽んじるわが国である。我身に降り掛かられるかもしれない。祭りの中で、「あー、日本はなんていい国なんだらう」と実感できる平和を、いつまでも続けることができるやう、低迷する時代であればこそ、何をなすべきか真剣に考へる時でもある。

因に毎日五千人も死んでいったワルシャワ・ゲットーの中で、生きるためにユダヤ会議議長の発案で「祭」がおこなはれたといふのだが、その後蜂起に失敗し、生き抜いたものはほとんどゐなかったといふ。

（神社新報）

神郡宗像の仲秋を飾る宗像大社の一大神事秋季大祭が、十月一日から三日に亘り盛大裡に斎行された。

この大祭は沖津宮・中津宮・辺津宮と三宮の神鑾が一年に一度会される祭りで、全国でも最大級の海上の祭典として有名な「みあれ祭」を皮切りに幕を開ける。

みあれ祭に先立ち、去る九月十日に玄界灘の絶海の孤島に鎮座する沖津宮の御神鑾を、大島中津宮まで御迎えする沖津宮神迎え神事が大島「第一春日丸」（船長佐藤精一氏）を御座船に厳粛に斎行され、大島中津宮本殿に奉安された。

十月一日早朝、あいにくの雨模様の天候となり祭典も少々内容を変更せざるを得なく無った。午前八時三十分中津宮出御祭を斎行。沖津宮、中津宮の御神鑾を奉安した輦台は海洋神事奉賛会の青年等に担がれ、大島小学校の鼓笛隊の先導により大島港中央ふ頭へと御神幸を行って、沖津宮御座船第五共進丸（船長宗岡次男氏）、中津宮御座船福吉丸（船長福崎真二氏）にそれぞれ輦台が奉安された。

一方辺津宮では午前九時神職三名奉仕のもと辺津宮出御祭が斎行され、辺津宮御神鑾が御座車に奉安されると先導車に先導され、沖、中両宮の神を御迎えする為神湊迄御神幸がなされた。

午前九時三十分、大島洋上で船団出港の合図である花火の音が響き渡ると先導船を先頭に御座船、供奉船とが一斉に白波を立てて大島港を出港。約四百隻の大船団は地ノ島方面に進路を取りながら進行、鐘崎沖で神湊迄御神幸を変更し、先導船の神職が大海原を祓清めながら「国家鎮護宗像大社」の大幟を掲げた御座船を導くように、約一時間の海上神幸を行った。

この勇壮な海上絵巻を拝観しようと、鐘崎から神湊までの海岸は雨にもかかわらず、日曜日ということもあって、いつもの年よりも大勢の人垣で埋め尽くされた。上空では取材用のヘリコプターが飛びかい、毎年観光船としてチャーターされている船に今年はスペースワールドの「ボイジャー」が前日より神湊に入港し祭典を一層盛り上げた。

定刻午前十時三十分、神湊港に御座船二隻が入港。入港を告げる花火が上げられるなか船は接岸した。

かくして一年に一度宗像三宮の御神鑾がお揃いになった。今年は雨天の為に魚市場にて頓宮祭を斎行。こうして宗像の秋をつげる秋季大祭が幕を開けた。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店　福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡(092)六五一－九四五六番
本店　京都市下京区沖小路六条北入（〒600）
電話 京都(075)三四一－三三四一㈹－四番
三四二－三三四一番

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女児、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は帯解きの祝いが行われていました。この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せをお祈りする、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期間　平成七年十一月一日～十一月十五日
（尚、この期間以外でも、おまつりは行っております。）

初穂料
一件（一人）三〇〇〇円
一名増すごとに二〇〇〇円の追加となります。

授与品
御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣などを授与いたします。

余滴

神郡宗像の秋まつりも終った。朝日の射す中、稲刈りを知らす部落放送が流れて来る。

今年は大豊作である。一昨年の冷害不作が〝うそ〟の様な、昨年以上の豊作で、黄金色の穂が重たげに秋風にゆれている。

イネ（稲）は世界大百科事典によると、原産は中国で前二千八百年に皇帝神農によって制定された儀式において、イネが重要な役割を果たしていたことが記されている。

日本では弥生初期に九州北部の筑紫平野で稲作が行なわれた遺跡が発見されている。

自然風土に恵まれ四季を通して生産される農作物の中で特に〝イネ〟と日本人の関係は深い。我々の祖先は自然の中に生命・豊饒・繁栄をもたらす力を産霊（むすび）という神格で把握し霊性を認めてきた。また自然界の様々な働き、現象に神々の産霊、神性、霊力を感じとってきた。この自然との調和、一体化を理想とし、その中に神々を祀り生活の中心としてあがめて来た。

日本人の主食であるイネを（生命の根）と呼び、コメを（神霊のこもったもの）と称え、すべての食物を（賜わりもの）として神々に感謝するのである。この神恩感謝が〝まつり〟の根となる。

神郡宗像に稲元と呼ばれる土地がある、宗像市の中央を流れる釣川の上流に広がる水田地で、今年も黄金の穂が重々しく秋風にゆらいでいる。

四季の農作業の中心である稲作を変る事なく次世代に伝える事が、今の我々に加せられた責務である。

第四二一回　宗像大社歌会詠草

大野展男選

毎月末日〆切

大島　河野　英子
朝光と共に巣立ちし燕等は競ふが如く中空をゆく

（評）長い間見守ってきた作者だろう。それだけに巣立ちした燕に寄せる喜びが素直に詠われ、「競ふが如く」は燕達の行動であると共に作者の気持の投影であり、光景が目に見えるようである。

日の里　大和美由紀
新しき砥石おろして研ぐ鎌は音さやさやと刃先光り来

（評）新しい砥石にむかって鎌を研ぐ一種の心弾みが、四、五句に具象的に描かれていて爽やかな労働歌。

福間　中村　勇
生れ来る吾子不具なれば道づれに死ぬ気でしたと被爆の母は

（評）語った女性の言葉をそのまま歌とし、ただただしい声調だがそれだけに迫力があり、被爆後五十年経った今でも私達の心をとらえて離さない。

曲　天野　玲子
遮断機の上るを待ちつつ仰ぎみる大空青く吸はるるごとし

鐘崎　安永　久子
街に住む娘にも見せたし窓越しに名画のごとく日の沈むさま

武丸　中村さつき
義弟の犬は尾を振り出迎ふる白さるすべり咲く花の下

日の里　河口　弘子
秋風に揺れて光れる柿いくつ熟さば送らむ足病む母に

田野森　甲子
洗濯物干しつつ見上ぐ西の空雲一つなく朝月淡し

大島　日原　節子
今年又会得し姉妹年老いて言葉すくなに故郷愛しむ

大島　屋形トミエ
草も木も一色となり静かなる中秋の夜の月冴えわたる

田久　井上　光
裏畑の風車に風の吹きつのり群れゐし蜻蛉草低く散る

田野森　つるの
雷鳴の激しき音に飼ひ犬は網戸押し開け居間に跳び込む

日の里　江口　徳子
手作りの嫁入りコート捨てがたく今年も手入れしタンスに戻す

土穴　瀧口　敦子
釣川の土手黒々と草焼かれ土の香つよし雨に打たれて

名古屋　小田　喜一
海鵜らの住み着く山につぎつぎに鵜の帰り来て夕べ騒がし

朝野　藤井　浩子
言ひ残すことがあるので泊れよと勧める母に淋しさ覗く

津屋崎　佐々木和彦
駅舎より見放くる秋の山並へいまだ一度も行きしことなし

名古屋　小田　留子
集積所のゴミの袋を嗅ぎながら犬は夜明の雨の中ゆく

赤間ケ丘　松本　澄子
干潮のときを乾ける海藻のしるく匂へり歩み来し浜

八幡東　古賀ハツネ
雑草も日照り続きに抜けがたし米寿となりし我が力には

河東　薄　かほる
野分きて葉を落し立つポポの木の根方に夕べ虫の声聞く

原町　八波　五月
老深みこもり勝なる我に子が阿蘇の湯宿にさそひて呉れぬ

吉留　白木うめの
指吸ひをやめて姉やんになったのよと小さく乾く吸ひだこ見る

戸畑　田中ハツセ
白き羽広げて飛べる姿とも鷺草の花鉢に群れ咲く

田島放生会

老若男女の歓声につつまれた三日間

日中の日差しも和らぎ、神都宗像に秋到来を告げる当大社秋季大祭が、十月一日より三日間厳粛盛大に執り行われた。

秋の大祭は田島放生会として郡市民に親しまれ、境内は露店を巡り、秋の夜長を楽しむ大勢の老若男女で大いに賑った。

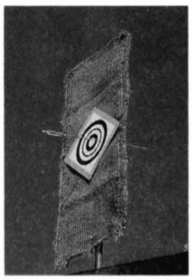
九月二十九日、地元総代の奉仕により、みあれ祭諸準備、社殿装飾、幟立て等の作業が行われ、大祭を迎える準備もすっかり整った。

大祭を明日に控えた三十日には、午後五時より総社地主祭、同六時には秋季大祭宵宮祭を斎行、明日からの大祭が無事執り行われるよう祈念されたが、夕刻からの雨模様に翌日からの大祭の天候が心配された。

大祭の幕開けとなる十月一日、昨夕来の雨足は弱くなったものの不順な天候で、神湊港から頓宮への陸上神幸は中止となった。一年振りに再会された三姫神は、神湊港での頓宮祭の後、同所より御座車にて神幸、正午前辺津宮へと入御された。

日曜とあって例年にない多数の参拝者が参列する中、入御祭を斎行。宮司が国家鎮護、五穀豊穣、大漁満足を祈念して祝詞を奏上、更に主基地方風俗舞が同保存会々員にて奏された。続いて宗像大社氏子会田芝会長、太宰府天満宮木本権宮司を始め各界代表が玉串を捧げて拝礼、空模様を眺めながらの一日祭も滞り無く斎行された。

二日午前八時、流鏑馬神事が執り行われ、福間町の宮木氏親子、松尾氏が烏帽子、直垂姿の古式ゆかしい姿で奉仕、神馬三頭が馬場道を疾走。昨日とは打って変わり透き通るような秋空に高く掲げられた的へ向けて、九本の矢が次々と射られ、その内の一本が、的の真中に見事的中、豊年満作が約束されると共に、拝観者からは称賛の歓声と一層大きな拍手が贈られた。



午前十一時例大祭を斎行。県神社庁宗像支部長大澄光信宮司（諏訪神社宮司）外一名による郡内神職奉幣の儀、宮地嶽神社阿部信祢宜、氏子奉幣使大森良信氏（玄海町）による奉幣詞奏上に続いて、喜多流梅津忠弘氏が神宝翁面の面を奉装して翁舞を奉納、国民の平穏無事、延命招福が祈念された。静寂な神苑に響きわたる鼓と笛の音、朗々とした謡曲は、参列者をしばし幽玄の世界に引き込んだ。

三日、午前十一時総社祭を斎行。地元玄海中学校女生徒四名が、可憐な十二単衣姿で浦安舞を奉納、乙女の清楚な舞姿は、参拝者を魅了した。

総社祭に続いて高宮祭、第二宮・第三宮祭、宗像護国神社秋季大祭を斎行。大東亜戦争終結五十年という節目の年を迎えた本年、護国神社には例年にも増して多数の遺族会々員と福岡県護国神社荒木田宮司、県議、市町村長、議会議長が参列、護国の礎として尊い命を散華された郡市出身の英霊に、深い感謝の念と敬虔な祈りが捧げられた。

午後二時からは滝口社中による献茶祭を斎行。神前で袱紗さばきも鮮やかな御点前により濃茶が点てられ、大神にお供えされた。

かくして三日間に亘る秋季大祭は、新生姜の馨しい薫りと、参拝者の楽しそうな歓声に満ち溢れ無事終了した。

氏子会総代総会開催

初秋の去る九月十四日午前十時より、宗像大社氏子会総代総会が当大社清明殿に於て開催された。

当日は出光氏子会々長を始め市郡内各地区の氏子総代二一〇名余りが参集、本殿参拝の後、総会が開催された。

先ず倉元副会長より開会の辞が述べられ、国歌斉唱、神宮並皇居遥拝、敬神生活の綱領唱和に続いて、出光氏子会長、養父宮司が挨拶を行い議事に入った。

議事は、秋季大祭々典日程並に神賑行事予定を担当神職が説明、氏子総代各位に参拝をお願いした。

また、秋季大祭の氏子奉幣使については、当番町の玄海町より選出していただくようお願いし、後刻玄海町の評議員、総代で協議され田島地区の副会長大森良信氏に決定した。

次いで平成七年度氏子会費についての説明が事務局より行われ、未納の地区は大祭期間中に、またはしかるべき時に納金していただくよう御協力をお願いした。

その後、今年八月から施工されている辺津宮拝殿屋根葺き替え並に神饌所修復工事、又中津宮本殿解体修理に関する事業の説明が太田権宮司より報告され、氏子・崇敬者の方々に本事業の御理解・御賛同を頂き、御奉賛を賜わるようお願い申し上げた。次いで事務局より御奉賛金のお取纏め、収奉方法についての説明を行い、全会一致で了承された。

かくして昼過ぎ全ての議題の審議を終了、赤間地区の井上評議員の音頭により万歳を三唱、目原副会長の閉会の辞を以って、氏子会総代総会は滞り無く終了した。

〔ご案内〕

十一月の各種神賑行事

錦秋の一日を当大社でお過ごし下さい

第二十五回　西日本菊花大会

当大社境内全域に九州・山口各県の菊花愛好家が丹誠込めて作り上げた銘花三千鉢以上を特設展示場に展示する西日本最高、最大の菊花大会です。秋晴れの神苑に大輪・懸崖・盆栽・総合花壇など見事な菊花が咲き競います。

期　日　十一月一日～十一月二十二日迄
会　場　境内全域（展示ハウス百余棟）
表彰式　十一月十二日

――◇――◇――

宗像大社の刀剣展

菊と刀といえば、古来から日本の象徴であったように、日本人の心をひきつける魅力があります。

今年から心を一新し新たな気持で神刀を中心に、崇敬者の方々の御協力のもと、鎌倉時代から現代までの刀剣類を展示します。

期　日　十一月一日～十一月二十三日迄
会　場　宗像大社神宝館一階
拝観料　三百円

――◇――◇――

第二十四回　奉納剣道大会

宗像地区の各剣道教室や学校で稽古に励む、小学生から大人迄の男女剣士七百余名が出場、宗像地区最高剣士の栄誉を賭けて熱戦を繰り広げます。

期　日　十一月三日
試　合　午前九時より
会　場　本殿脇境内
（雨天の場合は玄海小年自然の家）

――◇――◇――

第二十一回　奉納吟剣詩舞大会

錦秋の菊花薫る境内に、我が国の伝統と「大和精神」を伝える吟道に永年精進されている、熊本市に本部を置く清香吟社（会長益中鵬山）社中の会員約百名が、神前に詩吟・剣舞を奉納。清明殿に於て、日頃練磨した自慢の喉で、数多くの詩吟剣舞が披露されます。

期　日　十一月三日
午前八時三十分より
会　場　清明殿

――◇――◇――

第二十一回　奉納柔道大会

宗像郡市内中学校一・二年生約七十名が出場、参加選手達は母校の名誉と日頃の練習の成果を発揮せんものと対戦、力一杯の奮戦が繰り広げられます。

期　日　十一月五日
試　合　午後一時より
会　場　本殿脇境内
（雨天の場合は玄海中学校武道場）

――◇――◇――

第二十三回　献詠短歌大会

本年も県内を中心に、各地の短歌同好者から、たくさんの詠草が寄せられ、著名な斯界指導者の先生方を選者としてお招きし、講評・指導を受けると共に、参加者相互による批評、感想を発表する。選者の先生方と参加者が一体となった大会です。

期　日　十一月十一日
時　間　午前十時より
会　場　清明殿

――◇――◇――

第二十三回　秋季奉納盆栽展

秋の盆栽展は、春の盆栽展が皐月や藤など花物を中心としているのに対し、松柏類の木物を中心とした盆栽が約五十席展示されます。

いずれも、宗像大社奉納盆栽会々員秘蔵の作品です。

期　日　十一月十一日～十五日迄
会　場　祈願殿一・二階ロビー
観覧時間　午前九時三十分～午後五時迄

――◇――◇――

第十六回　少林寺拳法　奉納演武会

この演武会は、宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期　日　十一月十二日
会　場　本殿横境内
（雨天時中止）

――◇――◇――

第二十二回　宗像大社本因坊戦

宗像地区囲碁界実力ナンバーワンを決める大会で、宗像郡市内より囲碁愛好家百数名の有段者が出場、五段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加選手による有段者の部とが各々行われ、盤上での熱い闘いが繰り広げられます。

期　日　十一月二十三日
受付時間　午前九時三十分から五十分迄
会　場　清明殿

一誌一話 (46)

中国調査紀行 (九)

樂　杏子

敦煌市内を出て莫高窟へと通じる街道はポプラの並木が続いている。路幅は狭いがアスファルトの道である。いよいよ砂漠へと突入の地点にいき着き、これよりジープでゴビの砂漠へと入る。入った頃は痩せた低い木がまだ"ちょろちょろ"と生えていたが、すぐ大小の石と砂と黄土とが混濁した一面を造り出し、雄大な凹凸の大地となる。ちょうど大地は大海の大浪のうねりを見る様に続いている。

しかし時々思い出した様に草が大地より顔を出してきている。

この砂漠の中を時々大型のダンプカーが砂を巻き上げ猛スピードで疾走していく。また大型のトラクターも同様に往来している。後で聞いた話ではあるが、ゴビの砂漠の北端天山山脈の裾下に巨大な湖があり、そこでは岩塩を採取し、砂漠を渡って運び出しているとのことである。いまもこの塩は中国の国家と人々の生活や重工業などの産業の基となり続いてきている。この岩塩は中国大陸の悠遠の昔から人々の生活をささえ、多くの文化を作り出してきていた分である。

我々がホテルを出発するときも曇っていたが、ついに砂漠のなかで雨に会う、かなり激しく強い雨で走るジープの窓をたたく。大地には所々に水溜りもあり、深々とした大きな轍も目に入る。出発時の話ではそろそろ目的地の漢代の城壁門の「玉門館社」に到着しているはずであった。ちょうど砂漠へ入り二時間を経過している。しかしいまだ何もみえずジープは大海原の真只中にゆれる小舟であった。ここでとりあえず小休止を取り皆んなジープから下り、雨の中で背伸びをし息をつく。

さてもうすぐ玉門館だ、ということで新たな心で皆んな車に乗り走る。しかし一向に目的地に着かず。もう一度停車休息す。ガイドと運転手が我々には解せない言語で談合している、皆んな不安にかられる。ここで方向転換し直線でもとの導入口の堂河水庫の近くに引き返す。今までと違い、もう一つ見る所を先にすると急に変更し、進む。

そこも、漢の時代に造られた遺跡「陽関台址」である。

方向転換したためか、彼らが知る道か、今度は真っすぐ進んだ。陽関台に近づくにつれ緑が見え緑地の台地となってくる。途中で南煌という村落に入る。ここは水が豊富な河川があり、樹木におおわれた地と野菜が青々と繁った畑地とが連なる農村であった。

ようやく昼すぎて陽関遺跡に到着する。陽関は古く中国の紀元前の前漢の時代に漢王朝が造った「のろし」台である。やはり大きな城壁がある。

とりあえずここで休息とす。城門址の前にはみやげ店が一軒あり、広場もある。我々が入ると電灯がともり、明るくなった。おどろいたことには、人数分の弁当がきていた。確かに人数分だけは入っており、どうゆう伝達方式があるか不明であるが、私達が行くことが知られており、遅ればせながら行く所々に連絡が入っていることがおもしろい。

大東亜戦争終結五十周年
靖國神社参拝
―宗像郡・市遺族会十四年振り合同祭典を行う―

宗像市郡遺族会終戦50年記念旅行　於　靖国神社

宗像郡・市遺族会員の親睦旅行が、去る八月二十六日から三十日まで（四泊五日）の日程で「靖國神社参拝」を趣旨として、関東、東海、中部地方の名所旧跡を訪ねて、一一六名の会員が参加して行われた。

郡遺族会は例年、会員の研修と親睦をかねて旅行を実施してきたが、本年は特に大東亜戦争終結五十周年を迎え、総べての英霊が五十年祭となる節目の年で、これを記念して全国の英霊を祀る靖國神社に参詣、記念奉告の祭典を行うことが会員の間から提案された。

本誌八月号で掲載の宗像護国神社大東亜戦争終戦五十年記念奉告祭（八月十三日祭典）の斎行に際し、郡市遺族会役員会での打合せの時、担当神職より本年は特別な年であり全国の英霊の御霊を祀る靖國神社神前に、郡・市遺族会が合同で参拝、記念の祭典を行うことに意義があるとの申し出に役員一同了承、昭和五十六年に宗像町が市に昇格して、遺族会が郡と市に分離結成されて実に十四年振りに「宗像の心は一つ」と、靖國神社への参拝が実現。

旅行第一日目は市郡内各地より参加者一同三台の貸切バスにて集合、新門司港のフェリー到着所へ向い十四時三十分発の船に乗船、船中泊となった。

二日目は、大阪泉大津港に五時三十分着岸、直ちに西鉄バスに乗車一路西宮石阪、東名高速道を東進、富士宮市の浅間大社に昼過ぎ到着、自由参拝の後、オウムで有名となった上九一色村のサティアンと背後に聳える名峰富士山を遠望しながら、宿泊地の富士五湖の一つ河口湖に定刻到着。

三日目は八時出発、富士スバルラインをバスで登り五合目展望所に到着、眼下の大樹海林と点在する五湖、関東、信越、北陸の山並と盆地等変化に富んだ風景を堪能し十時に下山、中央高速道を東京へ進み皇居前に十一時過ぎ到着、昼食の後靖國神社へ向った。

予め参拝申し込みをしていた十三時に到着、受付控所にて同神社宮司大野俊康様の出迎えを得、参拝への御礼とご講話を賜り一同感激一入であった。神職の案内にて平時拝礼する舎殿でお祓を受け、最奥の「大鏡の御殿」へ参進、祝詞奏上の後、郡会長広嶋純孝氏、市会長出光太蔵氏、宗像大社祢宜山田幸雄の三名が代表して玉串を捧げ、参列者一同併せて拝礼を行った。玉串拝礼の後、一同神前で、今日ある郷土宗像の平穏と繁栄並に遺族の近況を奉告し、英霊の御加護に感謝と慰霊への誠心を込めて黙祷を行い退出した。御神酒を受け、五十周年特別展が催される遊就館を見学、英霊の遺品、遺稿、銃火砲等の展示品を前に一同当時の体験と肉親との別離へ思いを馳せ感無量の面持ちであった。

一同立ち去り難い気持を胸に十四時過ぎに靖國神社を辞去し、当初の予定には無かった千鳥ヶ渕の戦没者墓苑への参拝を行った。同墓苑は靖國神社より十分位の所にあり、大東亜戦争で海外の戦地で没した二百四十万余柱の遺骨を戦後収納し、遺族不詳により引渡し出来なかった三千四万余柱の遺骨を、無名戦士の墓苑として建立された霊苑で（財）千鳥ヶ渕戦没者奉仕会が会員の三阡円の年会費と善意の寄附に依り護持管理している。

遺族会では今年が初めての参拝である。職員の話しでは戦没者を慰霊するには大変苦しい台所事情とのことである。外国の様に無名戦士の霊苑として国並に公的機関に依り護持することが、英霊に対する国家国民が慰霊の誠と敬意を表す道ではないかと、一同想いを一つに、同墓苑を十六時に退苑し宿泊地の群馬県伊香保へ向った。

四日目は八時出発。伊香保の水沢観音に参拝の後、途中昼食、休憩を挟んで群馬、山梨、長野、愛知、岐阜、滋賀、京都、大阪と二府六県を一気に走破、泉大津港のターミナルに定刻到着、二十一時発に乗船々中泊となった。

五日目は瀬戸内の海路も穏やかに新門司港に定刻九時三十分着岸、貸切バスに乗車一路宗像に向け出発。正午頃には総べての参加者が元気に帰宅された。

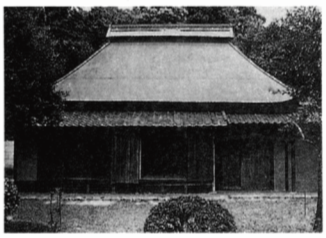
今回の旅行に際し、企画募集並定行程に添乗され、請事配慮をされた北九州市のユニバーサル旅行社、並に五日間の日程を安全に運行された西鉄観光㈱貸切バスの乗務員各位に、誌上を以って御礼申し上げます。

伊藤常足記念館見学記

宗像に隣接する鞍手郡鞍手町古門に鎮座する古物神社（もと剣神社・八幡神社、明治四年改称）の社家、伊藤氏は、慶長年間の伊藤春を初代とし、「古語拾遺」の註釈をした常信、「古事記」を筆写した常行、各地の神社縁起をまとめた常成など代々学問に親しむ者が多く輩出されている。

中でも常成の子、九代常足は幼少の頃より向学の志しが強く、十八才で藤崎見順に儒学の手ほどきを受け、二十三才の時、福岡藩の儒者亀井南冥の門人となる。更に二十六才で国学者青柳種信に師事し、三十一才で『太宰管内志』の編纂を思い立つ。

この『太宰管内志』は全八十二巻で、三十七年という永い歳月を費やして完成された九州全域の地誌をまとめた研究書であり、現在でも九州の歴史を知る上で、なくてはならないものとして、広く研究者に利用されている。



そして天保一二年（一八四一）、六十八才の時に福岡藩主黒田斉溥（のち長溥）にこの『太宰管内志』全八十二巻・『百社起源』・『太宰府徴』・筑前准風土記』・『陸奥准風土記』など計九十八巻、又嘉永二年（一八四九）には『百社起源続徴』・『古寺徴』など計四十巻を献上した。

『太宰管内志』編纂の間、二度の上京（京都・三十六才と五十才の時）により、城戸千楯・香川景樹・伴信友・足代弘訓等畿内近郊の諸名家と親交を結び、本居宣長の子大平を訪ね、弟子入りも果たしている。

五十七才の時には、福岡藩神社総帥（中心になる神社）の桜井神社（糸島郡志摩町）の神庫学館の創立に関わり、教授として日本書紀を講じたり、下関・黒崎・中間・底井野などに出向き、和歌の指導をしたり、又自宅にて私塾「古門小学」を開設して一般子弟を教育する等、教育者としても広く世に亘り、多くの門人や子弟を育てた。

安政五年（一八五八）、八十五才で亡くなる迄、執筆や講義を続けたその生涯はまさに学究の徒であったと云えるであろう。

この常足の長男十代常満は小田南豊（海儻）に入門、画業に励み、画号を南華（別号は栗庵）と称し、幕末の地方画家として活躍し、その作品は各地に今なお多数残っている。

十一代直江は、十五才の時に月形健助に入門して儒学漢詩を学び、明治元年（一八六八）、文武館の開館式では古事記の御前講義を勤め、明治四年（一八七一）、福岡藩学校教官に任じられ、藩内の教育に尽力した。その後は宗像大社禰宜として神明奉仕に励んだ。

この歴代伊藤家の人々の住まいが、平成二年（一九九〇）、鞍手町の『ふるさと創生事業』によって往年の姿に復元され、福岡県指定文化財「伊藤常足翁旧宅」として一般公開されている。

交通安全キャンペーン

宗像署では年三回、春秋の交通安全週間と、盆の前後にキャンペーンを行っている。当大社もこれに協力し、職員五名がドライバー達に安全運転を呼びかけた。

宗像市三郎丸の旧三号線脇にセーフティゾーンを設けし、誘導する警察官を見て検問と間違い、あわててシートベルトを締めているドライバーも、当社の巫女が「おつかれさまです。どうぞ安全運転をお願いします」とお守りを手渡すと、やっと顔がほころび、気持ちを新たにしてハンドルを握っていた。

この家は、常足翁十三才の天明七年（一七六八）、十一月に建られ、家の造りとしては、江戸時代の二の地方での一般的な農家の構えである。この時代の建築様式が現存しているのは県下でも極めて稀で、建築史学的に価値高きものであると共に、国学者伊藤常足翁がこの家で亡くなるまでの七十余年起居されたという極めて貴重な遺産である。

わが国には現在、約三五〇〇万台もの車があり、人生を変えてしまうほどの交通事故の撲滅は全国民の願いである。

交通事故の大半が交差点付近で発生しており、また自分中心の運転も大きな割合を占めている。

安全な車社会の実現にはドライバーの交通マナーの向上や、思い込み運転、うっかりミスが上げられる。

どうか皆さん、交通法規をよく守りになり、安全確認をして、安全運転をお願いします。

金色に輝く大扁額

宗像伝説でも有名な当社拝殿の「宗像宮」大扁額が、拝殿お屋根葺替工事に合せ修復された。この辺津宮拝殿扁額については次の様な伝説がある。

今を去る百三十年前、天保八年、宗像郡久末村（現在福間町久末）の庄屋を永く勤めた城戸五助翁が郡中の繁栄を祈願奉納されたと云う。額は縦五尺（一、五一五米）、横三尺五寸（一、〇六一米）あり、筆者は、従二位行権中納言藤原朝臣顕孝である。裏面には献納趣旨が青柳種春の撰文で彫刻されている。

その文によると、伊勢の廻国御師、藤田長年を通して花山卿に揮毫を依頼したが、花山卿が逝去されたので、葉室中納言（顕孝）が勅使として伊勢神宮に参向された機会に、藤田長年より申し入れて実現した事が知られる。頭上に迎ぐ大扁額から、さらなる郡中繁栄を祈る翁の敬神の念を再感する。

社務日誌抄

九月一日　月次祭・風鎮祭
九月六日　参議院議員橋本聖子氏他三名参拝
九月八日　大島戌亥会同年講十五名参拝
九月十日　沖津宮神饌迎え
神社新報社代表取締役社長葦津泰國氏参拝
九州燃料㈱社員九〇名参拝
宗像大社菊花会理事会
明治神宮毛利権宮司参拝
九月十一日　福岡アメリカンセンター館長ジュデス・ブライアン氏他二十九名来社
宗像大社秋季大祭打合せ四者会談
九月十二日　小西美術工芸㈱社長原登氏来社
九月十三日　宗像郡遺族会役員会
彦根城博物館学芸員来社
九月十四日　宗像大社氏子会総代総会
九月十五日　月次祭
鞍手郡若宮町日吉神社氏子会三千七名参拝
九月十六日　出光タンカー㈱取締役船員部長谷川光信氏、スーパーゼアス船長中ノ神健二氏、機関長橋本豊氏参拝
九月十七日　高良大社宮司竹間宗磨氏来社
九月十八日　宗像記者クラブ秋季大祭報道説明会
九月十九日　筑紫興産㈱代表取締役社長内田健蔵氏並同取締役総務部長二宮正明氏参拝
九月二十日　田島老人クラブ一〇〇名清掃奉仕
九月二十二日　出光タンカー
九月二十三日　出光タンカー
九月二十四日　出光タンカー
スーパーゼアス宗像大神鎮座祭養父宮司他神職二名出向奉仕
九月二十五日　出光タンカー
スーパーゼアス宗像大神鎮座奉祝祭前記神職出向奉仕
九月二十三日　出光タンカー㈱取締役船舶部長熊谷幸男氏参拝
九月二十五日　奉納盆栽展役員会
九月二十六日　玄海町消防団秋季大祭警備打合せ会
九月二十七日　祐徳稲荷神社宮司鍋島朝愉氏他二十七名参拝
宗像警察署交通安全キャンペーン神職一名巫女三名出向奉仕於三郎丸
九月二十八日　韓国在住日系婦人会美蓉会々長國田房子氏他二名参拝
九月二十九日　祐徳稲荷神社香田祢宜他二十六名参拝
地元総代並協力会秋季大祭諸準備奉仕
RKBテレビ「今日もどこかで」取材の為田島ディレクター他四名来社
九月三十日　秋季大祭総社地主祭・宵宮祭

宗像大社歌会 俳句作品集（三九一）

ひかりヶ丘　南　一雄
石猿のたまらず踊る祭笛

福　間　森　清
稲雀一屋根埋めし夕暮かな

自由ヶ丘　細川　絹子
遠隔の子を思ひやる秋の月

福岡中央　力丸　玄風
不器用に生きて八十路の栗拾ふ

日の里　花田いつ枝
指揮者なき闇に競へる虫の声

若　松　髙橋　忠實
草莢に背穂がゆれる月の影

藤　沢　井上　団平
サーファーのただ浮くばかり霧の海

福　間　二宮　末子
舟の中寝ながら見へるドームの灯

（続）海の寄物 101

パプアニューギニアの旅（二）

いしいただし

レイの中心地に入る。案内書には「緑に包まれた大都会」とある。街路樹はどれも巨木で、緑ゆたかで気持ちがいい。大きな建物はないが、小さな売店、コンビニエンスストアやスーパーマーケット風の店が各所にある。道路には頭に網袋をかけた買い物帰りの女性や子供達、店の周囲には男達がたむろしたりしている。通行人に乗車を呼びかけるパブリクバスの運転手、街は賑やかである。雨は降ったりやんだりで、むし暑い。

レイにて

宿泊予定のホテルは、いつの間にか変更されて、案内のフランジンの親戚の家に泊まることになった。前もって計画していることが、直前に変更されるなどが以後多く経験することになる。

その家は中心より少し離れた一画にあり、レイでも高級住宅地の部類に入る。どこも家はブロックや鉄筋造りで、下は駐車場になったりしている。それぞれ柵や金網がしてある。敷地には椰子（ココヤシ）、バナナ・パパイヤ等や花も植えられていた。

我々が宿泊する家は二階建てで、上はいくつかの家族が住んでいるようだったが関係はよく分からなかった。階下が我々の宿泊にあてられた。入口の横に炊事場があり、居間と奥にテーブルとイスがあり、ベッドとテレビが一台置かれていた。雨水を溜めて水洗便所とシャワー室もある。ひとまず荷物を置いて休憩。飛行機と車とを乗り継いできたためやはり疲れた。明日以後のスケジュールを確認する。

夕食を早目にたのんだが七時頃にようやく出来あがった。

居間にシートを敷き、運ばれた料理をそこに置いた。御飯（オーストラリア米）イモ、鶏肉と野菜を煮たもの、ミニトマト、玉ネギ、ニンジン、キュウリ等の野菜がプラスチックのボールに盛られてくる。あとはココヤシジュース、パイナップル、バナナがデザートに出された。料理のすべてに味や塩分はほとんどついていなく茹でたままである。

フランジンの親族達と、こちら五名で、それぞれ自己紹介をして、スーパーで買ってきてもらった缶ビールで乾杯、第一日目のスタートを祝った。

料理は味がないので、田中一彦氏が用意した酢醤油塩、唐辛子をふりかけて食べる。以後の旅はこれら調味料のためにどれだけ助かったか。唐辛子は口の中が熱くなるほどの強烈だったが食欲が増した。オーストラリア米は結構いけたが、盛られた量が多くて皆半分ぐらいしか食べれなかった。残った料理は集まった人達が分けて食べていた。

十時三十分ごろ、二つの部屋に分かれて寝る。床はコンクリートで、これも田中氏が持ってきたアルミシートを敷き、気温も低くなり（レイの月の平均気温は二十五度）シャツ、ヤッケ、ズボンを二枚はいた。集まった人達は外のベランダ側で、夜を明かしたようで、朝方まで話し声が聞こえていた。

翌日も同じような天気だったが、時折り陽が雲間から出ると陽射し強烈である。

前日にスケジュールを立てた通りにボタンカル植物園とメラネシアンアートセンターを見学をすることで街へ出た。小さな雨が降っていたが植物園の入口付近を少し歩いたあと、オーストラリア軍将兵の墓地に入った。太平洋戦争の犠牲者を祀ったもので、ゆったりとととられた広い敷地と管理が行き届いていた。

はじめての食事

途中で昼となり公園のあずまやで休憩、パンとジュースを近くの店で買って食べる。街の案内はフランジンの親戚の者達五人ぐらいが一緒についてくれた。日本人だけでは街を自由に歩くことはラスカルのこともあり、できない。この丘の下の方に旧飛行場がある。そのむこうに海が見えた。

街の中心部も歩いてみた。衣類や雑貨店が多くあるが、とにかく大勢の人達がブラブラ歩いている。ここでは日本人には会わなかった。

宗像むかしばなし

義人尾利又左ヱ門

隣船寺過去帳によると「唯春道雲居士正保二年五月二日尾利又左ヱ門」と、なっているので、彼の永眠の年は、今からざっと三百三十年の昔。徳川は、三代家光、又左ヱ門と関連のある話ではないが、丁度、島原の乱が平定された直後の頃である。

当時、神湊浦と鐘崎浦との間では、漁場の境界問題で、紛争が絶えなかった様子である。ただでさえ、識別の困難な海上の境界のこと、お互いに、感情的になると始末に終えぬ。越えた、越えぬの問題が現場での実力行使になったことも度々であろう。

とどのつまりが、お上の裁きをうける、と云う処まで来た。

この時の神湊の庄屋が、尾利又左ヱ門である。が、神湊の庄屋とは云うものの、皮肉なことに、彼は鐘崎の人、神湊には入庄屋で来ていた人だったのである。

来歴がどうであろうと、庄屋と云えば神湊の代表である。殊に、この場合、殺気立った一方の主張を代弁する闘争委員長でなくてはならない。根が鐘崎の人ともあれば、理否いずれにあろうとも、一方的につっ走らないかぎり、神湊の側からすれば、あらぬそしりも免れまい。かと云って、鐘崎にしてみれば、こうした彼の態度は、裏切り、忘恩、売名の名に値することは明白である。人間である彼が、苦しみ、悩み、動揺したことは充分に察しられるところのものである。

だが、しかしこうしたさまざまの俗念を、超克し得たものは、彼の公職にあると云う、強い自覚であった。

「人の栗を食むものは、人のために死すとかや」彼は神湊のために論じ、神湊のために闘い、ついに神湊を勝利へと導いた。

神湊にとっては彼は全く素晴らしい英雄にちがいなかったろう。だが、その彼は「もう、永久に鐘崎へは帰れない。自分が死んだら、せめて遺骨は、鐘崎の見える処へ埋めて欲しい」と、寂しく家人に語るものであった。

彼の死後、初めて彼の心情を知り得た神湊の漁師達は、泣く泣く遺骨を隣船寺裏の丘の上へと埋めた。此処からは鐘崎の風光が一目に展望出来るのである。

爾来、三百年の長い歳月、神湊の漁師の彼に対する感謝と崇敬の念が、少しも変わらないことは、不思議とも思える程である。

大漁とあれば鮮魚を供えて感謝と報恩の意を現すし、不漁とあっても、何かの供物を捧げて祈念すると云った具合に「灘右ヱ門さま、灘次郎さま」と、尊称される彼は、竜宮様と共に漁の守護神ともなっている。

文久十二年の隣船寺過去帳には、当時の庄屋水島与右ヱ門が施主となって、二百年祭を営んだことが記されているが、三百年祭は昭和十五年、神湊漁業組合が主体となって行われた。日支事変のさ中ではあったが昼は法会、夜は演芸と、町をあげての盛大な祭典であった。

神湊の漁業組合では、毎年、総会が初夏の頃に行われるが、この日は、又左ヱ門の供養を行う日でもあって、組合長以下、全員が墓前の法会に参詣することがならわしとなっている。この他、墓所の清掃、工作など、絶えず気が配られていることは云う迄もない。

三・四年前にもなるか、丁度この日、来合せた、鐘崎の漁業組合長が初めて、この人と、この功績を知って、大いに感動、神湊、鐘崎の両組合長が連れ立って法会に参列したことがあるが、地下の又左ヱ門にとっては此の上もない、嬉しい供養であったに違いない。

この話は昭和三十七年七月に当時隣船寺住職であった隣船俊氏から聞いた話である。あれから三十四年の歳月がたっている。

故郷の神宝 (18)

岩殿祭祀に供えられた品々

〈金銅製帯金具〉

六・七・八号の祭場からは、朝鮮半島製の多くの馬の装飾品が出土してきている。金銅製の帯金具は杏葉、雲珠・鞍金具と一緒に奉献されており、これらの馬具類を馬に着装するベルトが帯金具である。

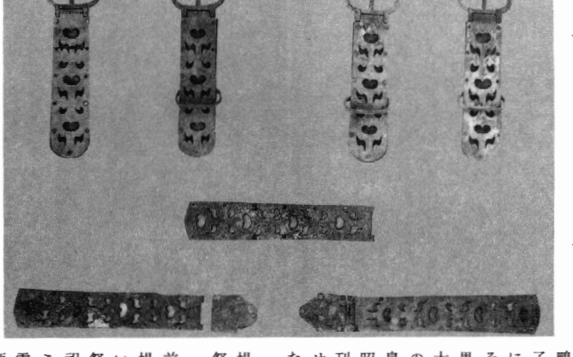
7号祭祀遺跡は横幅八メートル、縦三・五メートルの大きな祭場を構成している。

中央部には金指輪をはじめ、唐三彩の破片といっしょに玉類などの装身具を供えている。祭場の向って右側には、衝角付冑、小札を紐で綴じ合せた桂甲や盾状品と共に刀剣類などの武器、武具類である。

馬具類は祭場の左側に奉献したもので、杏葉、雲珠、鞍金具と一緒に帯金具が供えられていた。

金銅製帯金具は全て銅板を地金として鍍金した作りで、ベルトの両方の先端部分が残っている。中途の部分は布地が革製で繋ぎ留めていたと考えられる。

丁度一端はベルトのバックルと責金具とがセットで装着されている。もう一端はバックルとは反対側にある先端部分である。外反りの長い半円形を蝶番で留めている。



表地と裏地とを鋲で留め合せているが、表地には透彫の加工を施し、現代のベルトよりも一層華やかであり美的である。両面ともに外側には鍍金を施している。

表地には心葉形（ハート形）と雲形唐草文の透彫を行ない、透彫の周囲と全ての縁回りには連点文による縁取とを用いた複合形の文様としている。透彫の部分には内面に白雲母を入れ玉虫の翅を鋏み込んだ工夫を重に細工を行い、装着すると光線によりカクテル調の反射をみることが出来る様にしている。

同時に奉献されていた馬具類の中でも、心葉形の杏葉で鳥人文の透彫と、忍冬唐草文による棘葉形杏葉（伝沖ノ島）の透彫とに、連点文との併合による文様こらしている。この様に二帯に加工の同時制をみることが出来る。一方同様なことが金象嵌を施している鞍金具にもみる、雲形唐草文にも言える。

「玉虫の翅の飾りは朝鮮半島の北の朝鮮民主主義人民共和国の平安南道真坡里古墳出土の透彫金具や、大韓民国慶尚北道の金冠塚出土の鞍・鎧・杏葉等にもみられる。

わが国でも法隆寺の玉虫厨子や正倉院の鳥毛立屏風鴨毛屏風、刀子の鞘飾などに用いられ、その装飾的効果はきわめて大きい。」〈海の正倉院沖ノ島毎日新聞社昭和四十七年刊から転用させていただいた。〉

この七号祭場の裏手にも祭場があり、一つの巨岩で前と裏とに祭場が造られている。裏手の祭場は八号祭祀遺跡で、ここにも杏葉や雲珠等の馬具類が多く奉献されている。

両方の奉献品とも朝鮮半島製の物であり、六～七世紀代に比定されている。丁度半島は動乱期でもあるが新羅が強くなり、七世紀末には統一新羅の時代に入る。この時期の沖ノ島からの出土品は新羅製の物が多く、慶州の古墳からの出土品と類似している。〈松〉